

八幡工高新聞

発行者：滋賀県立
八幡工業高校新聞部
フライハイvo.7
万博

最先端の場所

その名は 大阪関西万博



2025年4月28日（月）、八工生は大阪の夢洲にある『2025年日本国際博覧会（通称：大阪・関西万博）』に訪れた。様々な人種、人々が集まり、世界の技術が結集した万博で八工生が感じたことを述べていく。

「いのち輝く未来」へつなぐ、万博の軌跡

2025年4月、日本が再び、万国博覧会の舞台となった。テーマは「いのち輝く未来社会のデザイン」。この壮大な構想は、単なるイベントではなく、世界が直面する課題——医療、環境、格差そして命在り方に正面から向き合う、未来社会の実験場ともいえる。我々八工生

は人生初となる万博に足を踏み入れた。万博当日、天候には恵まれなかった。しかしながら大勢の人々が訪れるほどの賑わいがあった。パビリオンは大小合わせて180以上にも上る。その内訳は万博のテーマとなっているシグネチャーパビリオン8館、国内パビリオン27館、158の国・

地域による海外パビリオンに分かれている。記者（西）はオマーン、カナダ、トルクメニスタンの3か所のパビリオンを周り、有意義な時間を過ごした。
残念ながら昼食は非常に割高となっていて、記者（西）のICOCAはすっからかんになった。

～こんなところに近江八幡～

シグネチャーパビリオンである『EARTH MART』では滋賀県近江八幡市にある『西の湖』の葦が使われていた。この建物は建築家・隈研吾氏が監修し、全国5地域から集めた自然素材を使って建築されている。

近江八幡の葦原は、古くから琵琶

湖の水質保全や生態系の維持に欠かせない存在として守られてきた。近年は保全活動と並行して、葦紙や建材などへの活用も進められている。今回の万博での採用は、全国さらには世界に広がるきっかけになることが期待されている。

カナダ館、ARでたどる「再生」の川旅

『命を支える』ゾーンでは先進的なAR（拡張現実）を使った展示が行われている。テーマは「Regeneration（再生）」。

来場者はAR技術を活用し、水中から川が生まれ、やがて自然と文化が広がっていく流れの旅を体感できる。

環境に配慮した再利用型建築やカナダのアートを伝える



↑タブレット端末を使ったAR技術

万博のメインキャラクター

このキャラクターは万博のメインキャラクターで、名前は『ミャクミャク』。由来は「脈々」と受け継がれる生命や文化を表す「脈」という言葉から来ている。

ミャクミャクのお土産品は非常に値段が高く、万博会場で買うならミャクミャクのアクリルスタンドやキーホルダー、小さなぬいぐるみであれば安く買うことができ、思い出に残るのでおすすめです。 記者（辰）



→ミャクミャクの後ろ姿

ミャクミャクは目の数は5個のように見えるが実は後ろにも1個あり、6個。このミャクミャクは特徴的な赤いリングが少し怖い見た目だが、かわいい声をしている。



オマーンの砂漠と人が紡ぐ絆

『命を救う』ゾーンで出展しているオマーン館。テーマは「Enduring Ties（永続する絆）」だ。水や土地、人とのつながりを大切にしてきたオマーンの歴史が本館では体験できる。

館内では映像型の展示が魅力で、砂漠の緑化や再生可能エネルギー、

水資源の活用法まで紹介されている。オマーンでは文化と経済の両面で世界との絆を深めている。



万国博覧会とは？

始まりは今から170年前の1851年で、イギリス・ロンドンで始まった。万博は「世界の工業製品と技術を集め、人類の進歩を示す場」として誕生し、その後フランス、アメリカ、ドイツなど各国で開催され、水晶宮（1851年第1回ロンドン万博）やエッフェル塔（1889年パリ万博）などを通じて未来像を世界に示した。

日本で最初の万博は1970年、吹田市で開催された『大阪万博』だっ



た。テーマは「人類の進歩と調和」。戦後、高度経済成長期を経て、世界へと羽ばたいた日本が、技術と文化の力を示した歴史的な催しだった。会場にそびえ立つ岡本太郎の『太陽の塔』は、55年の時を経て、今も人々に見守られている。

→大屋根リングから見た万博会場のようす

外から撮った様子
←想像以上に大きい

迫力満点な
←オマーンの映像展

当時、描かれた
←『水晶宮』